引越し雑感 －資料保存のはなし－

岩本克昌

現在、当館は開館以来30年余を経過したことにより、老朽化した電気、水道、空調等にかかる設備を一新するため、昨年９月から約１年間の休館中です。この間、寄居町にある施設に仮事務所を構えています。

館始まって以来の大規模な引っ越しを前に、職員は入念な準備を重ねてきました。そして、昨年９月から10月にかけての２か月間で無事終了しました。

現事務所は、旧県立寄居養護学校の閉校後、約７年間事務所として使用されることのなかった施設でした。この施設を博物館事務所として使用するメリットは、博物館の所在地である長瀞町から近い距離にあったことと、事務室、資料保管の適当なスペースが確保できることでした。

しかし、当初から学校施設として建てられたものであり、博物館事務所として使用するには、資料管理上いくつかのクリアーしなくてはならない問題点がありました。

① セキュリティーをどうするか。
② 温湿度管理をどうするか。
③ 重量物をどうするか、等々です。

博物館としての機能を兼ね備えた建物ではないので、当然なことばかりでした。

住んでみて驚いたことの一つに、テントウムシを始めとした小型昆虫類の多さでした。毎朝掃除をして取り除いても、翌朝にはまた何十匹もの闖入者たちがいました。この建物は小高い南斜面に建っているため、冬でも一日中陽光を浴びています。それゆえテントウムシの最適な集団越冬場所となっていたのです。侵入路となる恐れのある換気扇部分を目張りしてみましたが、あまり効果がありませんでした。どうやらアルミサッシのレールにある隙間部分からの侵入でした。事務室においては、テントウムシそのものが被害を与えることはありませんが、カメムシにはやや閉口しました。

資料の保存管理には、最近は総合的有害生物防除管理（Integrated Pest Management：IPM）の考え方が、職員の中に浸透しています。化学薬剤のみに頼らない、生物被害対策に努めています。しかし、今までとは比べものにならないほど厳しい環境に置かれているのも事実です。

陽光が降り注ぐ環境は、冬場はある意味快適に過ごせますが、裏を返せば夏場の高温高湿の問題があります。これは引っ越し当初からの懸念でした。もちろん、年間を通して空調の入る部屋も用意しましたが、設備上の問題などいろいろな制約から限られた部屋のみとなっています。

対策としては、太陽光の遮光を考えました。窓をベニヤ板で覆うことから始めました。紫外線を遮ることは可能ですが、温度の上昇を遮ることとともに、春から夏にかけて湿度の上昇も合わせて難しい問題といえます。温湿度の上昇、それに伴うムシ・カビの発生には頭を悩ませることになりそうです。

今回の引っ越しには、多くの皆さんの協力をいただきました。資料の中には、当館と同じ機構である川の博物館の協力を得て、分割収蔵したものもあります。管理という面においては、負担が大きくなりますが、一時的な対処としてはベストな選択と考えました。

昨年の東日本大震災で被災された各地では、全国からのボランティアの協力で破損、汚損された数多くの貴重な文化財がレスキューされつつあります。まだまだスタートの緒についたばかりではありますが、文化財資料の保存管理は一歩一歩前進していることも確かです。今回の引っ越しは、いかなる厳しい環境の中でも、博物館の使命の柱の一つである「県民共有の貴重な資料の適切な保存」について、今一度考える機会ともいえるのではないでしょうか。

もちろん、現状の対応策で完全な保存管理ができるとは保証されません。しかし、与えられた条件の中で館員が一丸となりベストを尽くしていくことが、我々の責務です。今秋のリフレッシュオープンの時には、皆様を笑顔でお迎えできるよう、着々と準備を進めてまいります。乞うご期待ください。

（いわもと　かつまさ・副館長）